

目次

1	近松の四つがな	1
2	接尾語「ずくめ」の仮名遣	31
3	曾根崎心中の「は」と「わ」——その仮名遣と仮名の字体	37
4	曾根崎心中の「い・ひ・る」	67
5	曾根崎心中の「う・ふ・む」	91
6	「ふ」を「ム」とよむこと——付、「は・ひ・へ・ほ」の場合	109
7	「ふ」を「ム」とよむこと——浄瑠璃本の場合	129
8	曾根崎心中の「え・へ・ゑ」	149
9	曾根崎心中の「お・ほ・を」	169
10	堀川波鼓の表記	191

11	浄瑠璃本の半濁音符	211
12	かなづかいの変遷	239
13	三馬の白圈	253
14	江戸期戯作の片仮名	281
15	近世のカとクワ——擬声語の場合——	299
16	明恵上人伝記の表記・文体	319
17	平家物語の「さぶらふ」	347
18	下学集で「日本俗」などの注記のある語二、三	367
19	アンドンとアンドウ	387
20	『ツーフハルマ』の方言 一	413
21	『ツーフハルマ』の方言 二	435
22	『ツーフハルマ』の方言 三	459
23	ベッドとベット	483
24	最近の外来語のアクセント	495
	所出一覧	503
	あとがき	505
	索引	507

- 七、八行二十四丁本、天理図書館蔵。奥書欠。
- 八、八行三十三丁本、天理図書館蔵。
- 九、七行三十八丁本、天理図書館蔵。

右のうち、第一によるべきものとしては最も信頼できると考えられる六行本を考えた。<sup>(3)</sup>

なお、右の諸本のうち、全く同版ではない（わずかに字形に違いが見られる）が字配り、仮名遣い等殆ど同じとみなしてよい箇所があるので次に記しておく。

- (一)、六の早稲田大学蔵八行二十四丁本と、七の天理図書館蔵八行二十四丁本の「一〇三、七〇十八、二二一〇二十四」丁。
  - (二)、同じく早稲田大学蔵八行二十四丁本と八の天理大学蔵八行三十三丁本の「一〇三」丁、六の「二二一〇二十四」丁と八の「三三〇三十三」丁
  - (三)、七の天理図書館蔵八行二十四丁本と八の天理大学蔵八行三十三丁本で、七の「一九〇二十四」丁と、八の「二一八〇三十三」丁。
  - (四)、六の「一五〇十六」丁と八の「一八〇十九」丁。
- 右の(一)、(二)、(三)、(四)、をまとめ、「六、七、八」三種の本に共通な部分を示すと次のようになる。
- (1) 六、七、八の「一〇三」丁、「七〇十三」丁。
  - (2) 六、七の「二二一〇二十四」丁と八の「三三〇三十三」丁。
  - (3) 六、七の「一五〇十六」丁と八の「一八〇十九」丁。

## 第一章 「は」「わ」の仮名遣について

### 一

近世の仮名遣に統一の見られないことは、すでに概説書等の述べる通りである。

藤井乙男氏は早く「近松全集」第一巻（大正十四年）のはしがきで次のように述べられた。

院本の用字例は極めて蕪雑放恣にして、あら笑止を荒笑止、いで其頃を出其頃、斯くて程なくを角て程なくとする類多く、仮名遣も不統一、送仮名も不足がちで、濁音ずつじぢの区別も乱れ、拗音のくわ、くわく、くわんは皆くはに従ひ、見捨ては見捨て、立ては立てて、又は立つて、書付ける、追懸けるは書付けける、追懸けけると読ませる例になつて居る。

右は恐らく多数の浄瑠璃本に接せられた氏の偽らざる感想でもあっただろう。

契沖は、元禄八年（一六九五）「和字正濫鈔」を著した。しかし、それが広く一般に行われるようになるということは江戸時代ついになかったのである。契沖以前に優勢であった定家仮名遣が近世を支配していたというのでもまた、なかった。勿論、一部にはそれらの仮名遣に従う人もあったが、多くはその両者の説く所から比較的自由な仮名の使い方をしていたのである。

然らばその仮名遣は全くの出鱈目であるかというに必ずしもそうとばかりも言えないのである。例えば、池上禎造